

世界の大学改革

大学教育研究センター主催の 国際セミナー開催



文・有本 章

(Arimoto, Akira)
大学教育研究センター長

国際共同研究プロジェクト の一環として

大学教育研究センターの主催によって、Academic Reforms in the World: Situation and Perspective in the Massification Stage of Higher Education = 「世界の大学改革—高等教育の大衆化段階の現状と展望」と題した国際セミナーが、去る二月六日、七日の両日、広島市の「ホテルセンチュリー21ヒロシマ」で開催された。

これは、世界六か国—中国、ドイツ、シンガポール、スイス、日本、アメリカ—が東洋と西洋の対話と交流を深めることを目的にして、協力推進中の教育に関する国際共同研究プロジェクトの一環を形成している。現在は六領域—教育評価・事実・指標、高等教育、職業訓練と教育、経済発展のための一般的技术、数学・理科教育、言語教育と識字—について学者レベルの共同研究が進められている。

日本を代表して高等教育部門を担当している大学教育研究センターは、平成七年ペンシルベニア大学で開催された「二十一世紀教育国際会議」への参加以来活動を開始していたが、このたび、各国の協力を得て国際セミナーを開催する運びになったものである。

第一日目は、主催者側からセンター長の主旨説明、原田学長および井上正幸文部省国際企画課長による来賓挨拶が行われた。ゼムスキー (R.Zemsky) ペンシルベニア大学高等教育研究所長の基調報告に続き、各国報告として、有本章大学教育研究センター長 (日本)、ガンポート

(P.Gumport) スタンフォード大学教授 (米国)、メツガー (C.Metzger) ヤント・ガレン大学教授およびグリン (F.Grin) ジュネーブ大学教授 (スイス)、ゴピナサン (S.Gopinathan) シンガポール国立研究所教育学部長 (シンガポール) がそれぞれ報告した。

第二日目はウェイ・シン (Wei.Xin) 北京大学教授 (中国)、ハルトマン (W.Hartmann) ハンブルグ大学副学長 (ドイツ) が報告し、これらの報告に関する議論や全体討議が展開され、最後にタイヒラー (U.Teicher) カッセル大学教授が総括報告をした。閉会式ではイップ (J.Yip) 前シンガポール教育部長の挨拶等が行われた。

二十一世紀の大学像を 模索するために

報告や議論の主たる内容は、第一に、大学を中心とした高等教育発展の基本的動向、第二に、大衆化段階に対応したシステムレベルと大学機関レベルでの大学改革の現状、第三に市場原理やアカウンタビリティの観点から見た大学組織改革、第四に、大学改革の現状と今後の大学の社会的機能との関係、などに焦点づけられた。

大衆化段階の大学改革を統一主題としたが、中国は前大衆化段階にあり、米国や日本はすでに成熟段階やポスト大衆化段階に入っており、スイス、シンガポール、ドイツはその中間段階にあるなど、各国の現状と課題は多様であることが判明した。

こうした実状を踏まえながら、主題とかわる概念、研究方法、現状、課題などをめぐって各国の個性が浮き彫りにされつつ活発な議論が行われ、予期した以上に実り豊かな成果を収めることができた。二十一世紀の大学像を模索するために各国の実情や経験を集中的に検討した結果、種々の貴重な知見や成果を得ることができたが、それらを今後積極的に活用することの意義とともに、こうした共同研究の継続の必要性が参加者の間で共通に認識されたといえる。

上記以外に外国からは、ツァン・リー (Zhang Li) 中国国立教育開発研究所次長、ベルセット (Beret) スイス連邦産業労働省監督官、デーヴィス (Davis) ペンシルベニア大学教育学大学院国際交流プログラム部長らが出席し、日本側からは大教センターの専任スタッフ、招聘研究者、オブザーバーが参加した。

とくに金子元久東京大学教授、山本真一筑波大学教授、別府昭郎明治大学教授、石橋義永共立女子大学教授、安原義仁広島大学教育学部助教授、大教センターの栗本和男、山野井政徳、大塚豊、モーガン (K.Morgan) 教授、羽田貴史助教授に司会等で協力を得た。

今回の成功はこれら参加者の方々をはじめ協力・支援された関係者各位のお陰であると、この誌面を借りて深く感謝する次第である。

なお、終始英語で行われたセミナーの詳細は、英文報告書として大教センターから出版される予定である。